

私の一冊

社会福祉学科 松平千佳 先生

ヤヌシュ・コルチャック著
『コルチャック先生のいのちの言葉：子どもを愛するあなたへ』

小鹿図書館 : 369.4/Ko 79 (明石書店)

私が皆さんに薦めたい1冊は、「コルチャック先生のいのちの言葉」(明石書店)です。ヤヌシュ・コルチャックは、1878年ワルシャワで生まれたユダヤ系ポーランド人です。小児科医として勤務した後、もっと子どもの側に、子どもの役に立つことがしたいと、孤児院を2つ開設しました。そして、その子どもたち200人とともに、トレ布林カ強制収容所に送られ、1942年にそこで死亡しました。コルチャック先生が生きた時代は、今と同じく、子ども受難時代でした。いいえ、すべての人間にとって極限の時代であったといえるでしょう。ナチス・ドイツによるユダヤ人の大虐殺(ホロコースト)、また国益につながらないという理由で行われた障害者の抹殺など、子どもを含めたすべての人間が未曾有の苦境に立たされました。そのような苦しい時代の中で、コルチャック先生は子どもの代弁者でした。子どもたちに共感し、深く理解し、そして大人と子どもの関係を国連子どもの権利条約(1989)につながるような枠組みで、書き残したのです。そうです、日本も批准した国連子どもの権利条約は、コルチャック先生が孤児院を子どもの自治にゆだねて運営しようと試行した時に、練り上げていった「子どもの権利大憲章」が下敷きに成っているのです。コルチャック先生は特赦が出ているにもかかわらず、子どもたちとともに強制収容所に行くことを選択しました。強制列車に乗せられるまで、彼は子どもたちの先頭に立ち、大通りを胸を張って堂々と歩く子どもたちを従えて行進したそうです。別れの朝、コルチャック先生が子どもたち一人ひとりにかけて言葉が残されています。

君たちの旅立ちにさいして、いまここに別れを告げなければなりません。

長い、長い、旅路への。

この旅には人生という名がつけられています。

私たちは、何度も何度も考えてみました。

君たちにどのような助言を与えるか、どのように別れを告げるべきか。

残念ながらその言葉は貧しく、ひ弱です。

私たちは君たちに、何も与えることはできません。

私たちは君たちに、神を与えることはできません。

神は君たち一人ひとりが、自分の魂の中に、
探し求めるよう努めなければならないからです。

私たちは君たちに、人間の愛というものを与えることは出来ません。

人間の愛は寛大さなくしてはありえません。

許すということは、容易なことではありません。君たちは、自分自身で、
寛大であるよう努めなければならないのです。

しかし、私たちは君たちに”一つ”だけ与えることができます。

より良き人生への、まことの、正しい人生への—今日ではありえない—
あこがれを贈ることができます。

おそらく、そのあこがれが君たちを、神へ、祖国へ、愛へと導くでしょう。

このことを忘れないように。さようなら。

岩波ジュニア新書：近藤 康子 著：「コルチャック先生」

この本を皆さんに薦める理由には、大きく分けて3つあります。1つ目は、この本に書かれているコルチャック先生の言葉には、私たちをはっとさせる名言がたくさん詰まっているからです。2つ目は、現代の子ども受難時代において、子どもの存在がどれほど大切なのか、子どもをどのように育てるかという問題が、私たちの社会に直結する問題であることに気づかせてくれるからです。3つ目は、このような偉大な先人たちの功績によって現代社会あるいは社会福祉が成り立っている、ということが分かるからです。私たちの存在は決して単独のものではなく、ましてや突然現れたものでもなく、多くの人間の積み上げの上に成り立っていることをよく理解している必要があると思います。

私自身、仕事をしていて気持ちが疲れたとき、原点に立ち返って考える必要があるとき、何のためにこの仕事をしているのか再認識する必要があるとき、コルチャック先生の言葉を読み返すのです。

子どもの近づくとき私は二つのことを感じます。

今日のあるがままの子どもへの愛情、

そして

子どもの将来の可能性に対する敬意、

この二つのことです。

この言葉を読んで、未来につながる希望ある人間社会の形成が、私たち大人の責務であると、再び自分を奮い立たせるのです。